溜池通信 vol.683 ***Biweekly Newsletter*** *January 31st 2020*

双日総合研究所
吉崎達彦

Contents **********

特集：2020 年のアイオワ州党員集会 1p
＜今週の”The Economist”誌から＞
”Could it be Bernie?” 「まさかのサンダース？」 7p
＜From the Editor＞ トランプ・ビンゴ！ 8p

****

特集：2020 年のアイオワ州党員集会

2020 年はつくづく波乱の年です。年明け早々、米国とイランがあわや全面衝突か、と焦りました。今度は、武漢発の「新型コロナウイルス」が怖くてなりません。最初の 1 カ月だけでこの調子ですから、いかにも前途が思いやられます。

米国政治では、大統領弾劾裁判が 2 週目を迎えていて、ジョン・ボルトン前国家安全保障担当補佐官を証人に呼ぶかどうかが焦点となっています。当初、共和党指導部が目論んでいたような、「2 週間で終わらせる」ことはどうやら困難なようです。この間に、間もなく民主党の予備選プロセスが始まります。**来週 2 月 3 日（月）のアイオワ州党員集会が過ぎると、一気に景色が変わってくる**のではないかと考えています。

●なぜ序盤州はかくも重要なのか

米大統領選挙の予備選において、いつも一番手に登場するのがアイオワ州とニューハンプシャー（NH）州である。なぜ、いつも同じ州なのか。それでは他の州から見て不公平ではないのか、と感じる人は少なくないだろう。

言ってみれば、これは**「箱根駅伝」と似たような不条理である**。年明け早々の箱根駅伝は、お正月 TV のキラーコンテンツであり、一度、見始めたらなかなか止められない。しかるに関東の大学だけが参加するローカルな駅伝大会が、全日本の大会以上に注目されている現状は、考えてみればおかしな話である。これでは長距離を目指す高校生ランナーは、こぞって関東の大学に入学することになってしまう。

それでは現状を変えられると言えば、それも簡単ではない。箱根駅伝には長い伝統があり、幾多の名勝負があり、それで多くのファンを獲得してきた歴史がある。**一度、定着してしまった制度は、なかなか変えられない**。キーボードの配列が”QWERTY”になっているのと同じ、経済学でいう「経路依存性」の問題なのである。

それくらい米大統領選挙の歴史において、**アイオワ州党員集会（Caucus）と NH 州予備選挙（Primary）はいくつもの名勝負を生み出してきた**。この 2 か所の戦いが始まる前までは、世論調査の数字だけが頼りで、たまたま数値が高かった候補者が「フロントランナー」と呼び慣わされている。

しかし実際に予備選挙が始まると、「アイオワ州で 1 位だった××候補」「NH 州で 2 位だった××候補」などと**明確な序列ができる**。メディアの扱いもはっきりと違ってくる。そうなると、一気に選挙戦は違った様相を見せ始めることになる。

〇民主党予備選の序盤戦

	アイオワ州	ニューハンプシャー州	指名候補者	大統領当選者
1984 年	W・モンデール	ゲイリー・ハート	W・モンデール	R・レーガン
1988 年	D・ゲッパート	M・デュカキス	M・デュカキス	G・H・W ブッシュ
1992 年	トム・ハーキン	P・ソンガス	ビル・クリントン	ビル・クリントン
1996 年	なし	ビル・クリントン	ビル・クリントン	ビル・クリントン
2000 年	アル・ゴア	アル・ゴア	アル・ゴア	G・W・ブッシュ
2004 年	ジョン・ケリー	ジョン・ケリー	ジョン・ケリー	G・W・ブッシュ
2008 年	バラク・オバマ	H・クリントン	バラク・オバマ	バラク・オバマ
2012 年	なし	バラク・オバマ	バラク・オバマ	バラク・オバマ
2016 年	H・クリントン	B・サンダース	H・クリントン	ドナルド・トランプ

〇共和党予備選の序盤戦

	アイオワ州	ニューハンプシャー州	指名候補者	大統領当選者
1984 年	なし	R・レーガン	R・レーガン	R・レーガン
1988 年	ボブ・ドール	G・H・W ブッシュ	G・H・W ブッシュ	G・H・W ブッシュ
1992 年	なし	G・H・W ブッシュ	G・H・W ブッシュ	ビル・クリントン
1996 年	ボブ・ドール	パット・ブキャナン	ボブ・ドール	ビル・クリントン
2000 年	G・W・ブッシュ	ジョン・マッケイン	G・W・ブッシュ	G・W・ブッシュ
2004 年	なし	G・W・ブッシュ	G・W・ブッシュ	G・W・ブッシュ
2008 年	M・ハッカビー	ジョン・マッケイン	ジョン・マッケイン	バラク・オバマ
2012 年	R・サントラム	ミット・ロムニー	ミット・ロムニー	バラク・オバマ
2016 年	テッド・クルーズ	ドナルド・トランプ	ドナルド・トランプ	ドナルド・トランプ

過去の序盤戦 2 州の戦績を上にまとめてみた。それほど明確な規則性はないのだが、**「2 つの州は違う候補者を選出することが多い」**「（強いて言えば）**民主党はアイオワ州、共和党は NH 州を勝った候補者が生き残る**」といった傾向を読み取ることができるだろう。

大統領を目指す候補者たちは、当然、こうした過去の傾向を研究した上で選挙戦略を立てる。そしてときには 1 年以上前から、2 つの州に足しげく通う。人口はアイオワ州が 300 万人、NH 州が 130 万人と小規模なので、その気になれば資金量の乏しい候補者でもくまなく州内を回ることができる。得られる選挙人の数はたいしたことはないのだが、**2 州の選挙結果は、その後の候補者を位置付ける格好の「指標」となる**のである。

●アイオワ州は過去にどんなドラマを生んだか

候補者を選出するプロセスは 2 州ではかなり違う。アイオワ州はその名も Caucus（党員集会）なので、**その場に集まった党員が「話し合って候補者を決める」**。参加者が周囲の「同調圧力」を受けて、途中で支持を変えさせられたりもする。これに対し、NH 州は Primary（予備選挙）なので普通の投票形式であり、誰に投票したかを他人に知られることはない。

ゆえに **Caucus の予想は良く外れる**。過去においては以下のようなドラマが生じている。

＊ **2016 年選挙：**①ヒラリー・クリントン候補が 49.8%、②バーニー・サンダース候補が 49.6%という紙一重の勝負となった。しかるに 99 地区中、両者の支持が拮抗してコイントスで決めた地区が 6 つあったのだが、それらはすべてヒラリー支持となった。何の作為もないとは到底、考えられない確率であった。

- 党幹部たちが強引な「ヒラリー推し」をしたのではないか、との疑惑は、サンダースを支持する左派や若者層の間に強く残った。**今年の選挙でサンダース勝利となれば、彼らにとっては「復讐劇の成就」**ということになるだろう。

＊ **2008 年選挙：**①バラク・オバマ 38%、②ジョン・エドワーズ 30%、③ヒラリー・クリントン 29%であった。**人口の 95%が白人である州で、黒人候補者が 1 位になった**、という結果は全米で重く受け止められた。オバマは、そのまま大本命のヒラリー候補を相手に堂々の選挙戦を展開し、見事に大統領の座を射止めることになる。

- 当時のオバマ選対本部は資金不足に苦しんでいて、「アイオワ州で負けたらそこで解散」という状況であったという。
- 「アイオワ州を踏み台に、無名候補が一気に大統領にまで駆け上がる」という物語は、古くは 1976 年のジミー・カーターの例がある。こんな風に**「支持者が候補者と恋に落ちる」ときの民主党は強い**。逆に「共和党員は親が決めた相手でも黙って投票する」などと言われる（The Democrats want to fall in love, while Republicans fall in line when selecting their presidential candidate.）。

＊ **2004 年選挙：**この年の民主党予備選挙ではハワード・ディーン候補が大人気で、序盤州でも圧勝すると見られていた。しかしふたを開けてみると、①ジョン・ケリー38%、②ジョン・エドワーズ 32%、③ハワード・ディーン 18%と 3 位に失速していた。当時、ブログという「新兵器」を駆使して人気を得ていたディーンは、**党員集会というリアルな空間では意外と弱かった**。「打倒、ブッシュ大統領」のために民主党員が選んだのは、ベトナム戦争の英雄で、政治経験豊かなケリー上院議員という無難な候補者だった。こんな風に、ときに候補者の「足切り」を行うのもアイオワ州の特色である。

- ディーンはバーモント州知事で左派の候補者であった。同じくバーモント州選出の上院議員であるサンダースとは妙に重なる部分がある。しかし現在のディーンは、「サンダースのような高齢候補者は選挙に出るべきではない」と言っている。

●“Iowa Caucus”で世論調査は当てにならない

さて、週明けの党員集会ではどんな結果が出るのだろうか。

当てにならないことを承知で RCP の世論調査を見てみると、以下の通り**バイデンとサンダースが「2 強」を形成している**[1]。1 月下旬に左派・進歩派のサンダースが急上昇し、現在は平均値でも中道・穏健派のバイデンを凌いでいる。

その後をブティジェッジとウォーレンが追い、このところ上昇気味のエイミー・クロブチャー上院議員が 5 番手につけている。全国調査では 5 位内に入るブルームバーグ元 NY 市長は、登録が間に合わず、予備選参加は 3 月 3 日のスーパーチューズデー以降となる。

○Iowa Democratic Presidential Caucus

Poll	Date	Sanders	Biden	Buttigieg	Warren	Klobuchar
		上院議員(78)	前副大統領(77)	市長(38)	上院議員(70)	上院議員(59)
RCP Average	**1/20 - 1/27**	**23.8**	**20.2**	**15.8**	**14.6**	**9.6**
Monmouth	1/23 - 1/27	21	23	16	15	10
Iowa State	1/23 - 1/27	24	15	17	19	11
Emerson	1/23 - 1/26	30	21	10	11	13
USA Today/	1/23 - 1/26	19	25	18	13	6
NY Times	1/20 - 1/23	25	17	18	15	8

正直なところ、筆者は**上記 5 人のうち誰がトップに来ても不思議はない**ような気がしている。「蓋を開けてみなければ分からない」のがアイオワ州における過去のパターンであり、むしろ結果が出てからそれをどう解釈するかが重要になると言えよう。

1. 2016 年パターン：サンダースがトップになって前回の雪辱を果たす。
   - 前回 2016 年選挙で、**民主党に足りなかったのは左派や若年層の「情熱」**。党本部のコントロールを弱めることで、活力を取り戻すべき。
2. 2008 年パターン：ブティジェッジ、クロブチャーといった**「新顔」が急浮上する**。
   - あまりに高齢な候補者では新鮮味は乏しく、ここは意外な候補者が登場して米国政治の二極化を相対化することが望ましい。
3. 2004 年パターン：**「トランプに勝てる候補者」ということで順当にバイデンを選択**。
   - 前回 2016 年選挙における民主党の敗戦は、①五大湖沿岸州の白人ブルーカラー層をトランプに取られ、②黒人の投票率がオバマ時代に比して低下したことが原因。ゆえにペンシルベニア州の労働者出身で、黒人に人気のあるバイデンが最適。

[1] https://www.realclearpolitics.com/epolls/2020/president/ia/iowa_democratic_presidential_caucus-6731.html

●アイオワでの主役はやっぱりあの人？

ここへきて目立つのは「サンダース脅威論」である。正確に言えば、「サンダースが民主党の候補者になることで、トランプの再選確率を上げてしまう」ことを懸念していて、「今週の The Economist 誌」のコラムはその典型である（P7 の抄訳を参照）。

いつも参考にしている賭け事サイトをチェックしてみると、案の定、**サンダースが 2 位につけているけれども、トランプ大統領とのオッズの差は圧倒的**である[2]。

○US Presidential Election 2020

ドナルド・トランプ	4/5	（1.8 倍）
バーニー・サンダース	4/1	（5.0 倍）
ジョー・バイデン	5/1	（6.0 倍）
マイケル・ブルームバーグ	11/1	（12.0 倍）
エリザベス・ウォーレン	22/1	（23.0 倍）
ピート・ブティジェッジ	33/1	（34.0 倍）

この辺りの事情をよく示しているのが、選挙資金の集まり具合である[3]。昨年末までの資金を見ると、民主党内では 1 位がサンダース、2 位がウォーレンと左派候補者が優位に立っている。ひとつには”ActBlue”（アクトブルー）という小口献金プラットフォームが、民主党の進歩派候補に潤沢な資金を供給しているからであろう。

対照的に**バイデン候補は 6 位と出遅れている**。資金量という尺度で見ると、中道派はいま一つ熱意において欠けるようである。

01/01/2017-12/31/2020

Name	Total raised
1. TRUMP, DONALD J. [REP]	$165,327,323.60
2. SANDERS, BERNARD [DEM]	$74,516,833.41
3. WARREN, ELIZABETH [DEM]	$60,339,946.81
4. BUTTIGIEG, PETE [DEM]	$51,579,028.50
5. STEYER, TOM [DEM]	$49,646,474.66
6. BIDEN, JOSEPH R JR [DEM]	$37,785,293.38
7. HARRIS, KAMALA D. [DEM]	$36,940,238.03
8. DELANEY, JOHN K. [DEM]	$27,198,228.24
9. BOOKER, CORY A. [DEM]	$18,494,484.80
10. KLOBUCHAR, AMY J. [DEM]	$17,516,387.53

[2] https://www.paddypower.com/politics?tab=usa

[3] https://www.fec.gov/data/raising-bythenumbers/　候補者が多過ぎて、民主党の資金が分散している。

●来週以降の米国政治情勢

昨年来、民主党の攻め方はずっとちぐはぐな印象を否めない。まず、変なタイミングで大統領弾劾裁判を始めてしまったので、予備選挙への影響が出てしまった。しかもイラン問題、新型肺炎などのサプライズが続いて、予備選挙への国民の関心は低下気味である。弾劾裁判は、ここへきて「ボルトンの証人喚問」で少し盛り上がっているが、トランプ大統領の支持率に与えた影響は軽微だと言っていい。

また、日曜日はさすがに弾劾裁判もお休みとなるが、2 月 2 日に上院議員の候補者たちがそれっとばかりにアイオワ州に乗り込んだとしても、この日はマイアミでスーパーボウルが行われている。有権者は、なかなか家の外へ出てきてくれないかもしれないのだ。

そして **2 月 4 日には一般教書演説が予定されている**。「弾劾裁判中の大統領による一般教書演説」といえば、1999 年 1 月 19 日にクリントン大統領による前例がある。このときは弾劾のことにはほとんど触れず、**"My fellow Americans, I stand before you to report that *the states of our union is strong.*"** （国民の皆さん、私は今日ここに、わが国の現状は強力であることを報告します）との名文句を吐き、米国経済の好調さをアピールしたものである。果たしてトランプ大統領はどんなことを語るのか。

予備選日程は、アイオワ、NH の次はネバダ州、サウスカロライナ州へと移る。それぞれ「ヒスパニック票、黒人票をどの候補者が取るか」が焦点となる。そして 3 月 3 日には、**全体の約 3 分の 1 の選挙人が一斉に決定するスーパーチューズデー**が控えている。ここまでくれば、民主党の大統領候補者はかなり絞り込まれているはずである。

その一方で、なかなか決め手がなく、候補者決定が 7 月の民主党大会までもつれ込む可能性も残る。短期決戦か持久戦か、そのカギを握るのは来週の序盤戦ということになる。

〇2020 年アメリカ大統領選挙日程

2 月 2 日	スーパーボウル（マイアミ）
2 月 3 日	アイオワ州党員集会
2 月 4 日	トランプ大統領が一般教書演説
2 月 7 日	第 7 回大統領候補討論会（NH 州マンチェスター）
2 月 9 日	米アカデミー賞授賞式（ロサンゼルス）
2 月 11 日	ニューハンプシャー州予備選挙
2 月 19 日	第 8 回大統領候補討論会（ネバダ州）
2 月 22 日	ネバダ州党員集会
2 月 25 日	第 9 回大統領候補討論会（サウスカロライナ州）
2 月 29 日	サウスカロライナ州予備選挙
3 月 3 日	スーパーチューズデー（カリフォルニア、テキサス、ほか 11 州が開票）
3 月 10 日	ミシガン、オハイオほか 4 州で予備選挙、ノースダコタ州党員集会
3 月 17 日	アリゾナ、フロリダ、イリノイ州予備選挙
3 月 24 日	ジョージア州予備選
4 月 4 日	アラスカ州、ハワイ州、ルイジアナ州予備選挙
4 月 7 日	ウィスコンシン州予備選挙
4 月 28 日	ニューヨーク州ほか 5 州で予備選挙

＜今週の”The Economist”誌から＞

”Could it be Bernie?” Lexington

「まさかのサンダース？」 January 25th , 2019

＊緒戦のアイオワ州党員集会を控えて、サンダース上院議員の人気が急上昇しています。このまま一気に行っちゃうかもしれません。民主党、それでいいんでしょうか？

＜抄訳＞

ニューハンプシャー州の雪深いビール工場で、バーニー・サンダースは完全防寒の聴衆に向かい、野心的な「やることリスト」を語り上げた。医療、教育、インフラ計画などで政府歳出を拡大し、連邦予算を倍増させる勢い。それに留まらず、彼は中国とインドとパキスタンを説き伏せ、核兵器予算を気候変動に向けさせると言う。初期労働運動や婦人参政権に触れつつ、「社会変革は急激に進むものだ。誰も止めることはできない」と。

2016 年選挙以前、知られざる左派候補だった時代から、彼は怒りを売りにしてきた。かつて「信じられる未来」だった選挙スローガンは、単に「バーニー」になった。30 年前から「巨大企業」を非難してきたが、「時代がやっと彼に追いついた」という評価の声も。

だがビール工場を一歩出れば、そんな熱狂的な変化など見当たらない。16 年の成功はヒラリーへの不満があればこそ。そして民主党の左傾化にもかかわらず、今でも彼は異端の人のままだ。国民皆保険の主張は浸透したとはいえ、彼が夢見たほど急進的なものではない。知名度でも資金力でも他の候補を圧倒しているが、支持率は 4 年前の半分程度である。

ところがアイオワ州党員集会の 2 週間前になって、サンダースは見違えるようになった。集金も順調で、賭けサイトでは 6%だった評価が 29%になっている。民主党本流派は動揺し、ヒラリーは「彼は嫌われ者だ」と言い始めた。いったい何が起きたのだろう？

2016 年同様、ライバルの弱点が彼の強みだ。バイデンは中道左派をまとめられず、ブティジェッジの方が魅力的。ウォーレンは左派と穏健派に同時にアピールしようとして、両方を苛立たせている。だからこそ、サンダースの少ないが固い支持者がモノを言う。もしも左派を統一し、中道左派がこのまま分裂していれば、序盤州で優位を獲得できよう。ドナルド・トランプが熱狂的支持者を背景に、共和党指名を得たときと同じ手法である。

しかしトランプよりも苦労するだろう。共和党予備選挙は勝者総取り方式だが、民主党は比例配分方式だからだ。ただし資金が潤沢なので、他候補が脱落するのを待てる。民主党主流派への彼の敵意は深く、先頭ランナーになればこれまで以上にアピールできよう。

穏健派の懸念をよそに、有権者は好き嫌いで候補者を判断する。彼の不機嫌さは真面目さに、思想的強情さはブレない姿勢と受け止められる。7 割以上が彼を「好き」で、聴衆は彼が正直だと思い、親しみを感じている。大盤振る舞いの公約は知られていらず、本誌が「サンダースは社会主義者だ」と言っても、支持者は余計なことだと思うだけだろう。

たとえ急進的であっても、民主党はサンダースを指名するかもしれない。ただしその決断は、トランプを再選から遠ざけるものではあるまい。

＜From the Editor＞　トランプ・ビンゴ！

トランプ大統領の弾劾裁判は連日、長時間に及んでいますが、この間、100 人の上院議員はずっと席に就いていなければなりません。しかもこの議論、聞いていて面白いものではありません。攻める側も守る側も、だいたい言いそうなことはわかっているし、もとより与野党ともに相手側に歩み寄るつもりなど全くないのであります。

もっと困ったことに、議場においては携帯電話やコーヒーの持ち込みは禁じられている。もちろん iPad も禁止だが、なぜかアップルウォッチの携帯は許されている。弾劾裁判が 2 週間目に入ると、さすがに私語が多くなったり、居眠りをしたり、非常に長いトイレ休憩に立つ議員が目立ち始めているとのこと。

こうなると、5 人もいる 80 代議員の健康状態が心配である。とはいっても、御年 78 歳のバーニー・サンダース議員の場合は元気溌剌、気持ちは既にアイオワ州に飛んでいることでありましょうが。

さて、このたび上院の議場内で、こんなカードが発見されました。下記の”Trump Bingo”では、トランプ弁護団が下記の言葉を使うたびに、カードに穴をあけていく。縦、横、斜めで一列空けば「ビンゴ！」となる。いや、もうこんなことくらいしか暇つぶしがないのでしょうか、上院議員諸氏は。

#1 The call was perfect	#2 Trump had valid concerns	#3 No harm no foul (they got the aid!)	#4 Obama did it	#5 The House wants you to do its job
#6 It's all hearsay	#7 Mueller found NO COLLUSION	#8 It was SO unfair!	#9 Abuse of Power isn't impeachable	#10 The Whistleblower was biased!
#11 Impeachment will undo the election	#12 Schiff is a liar	FREE SQUARE Hunter Biden should be investigated!	#13 Trump said there was no quid pro quo	#14 The Ukrainians didn't even know!
#15 Joe Biden is corrupt!	#16 The evidence is insufficient!	#17 Zelensky said nothing was wrong	#18 Trump wants to save the presidency	#19 The House should have gone to court
#20 Trump invoked valid privileges	#21 Trump gave Ukraine more support than than Obama	#22 There is no crime	#23 The Articles are duplicitious	#24 Abuse of Congress isn't impeachabe

という冗談はさておきまして、アイオワ州と言えばケビン・コスナー主演の映画『フィールド・オブ・ドリームス』（1990 年）を思い出します。あの映画の中には、小学校の「有害図書を取り除くべきか否か」をテーマに、PTA が白熱の議論をするシーンが出てきます。察するに党員集会というのも、あんな風に「草の根民主主義」を実践する場なのでありましょう。これでは予想が当たらないのも無理はないですよね。

さて、映画の中で登場した野球場ですが、今は観光名所となっているそうです。そこへ 2020 年 8 月 13 日には、メジャーリーグがやってくる。「フィールド・オブ・ドリームス球場」にはそのために 8000 人の客席が建設され、シカゴ・ホワイトソックスとニューヨーク・ヤンキースが公式戦を行うとのこと。なんと、本当のことになるのですね。

“If you built it, he will come.”

まさしく「夢の大地」ではありませんか。

＊　**次号は、2020 年 2 月 14 日（金）にお送りします。**

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記あてにお願します。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル　http://www.sojitz-soken.com/
双日総合研究所 吉崎達彦　TEL:(03)6871-2195　FAX:(03)6871-4945
E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com